

〈総説〉

動詞上昇を用いたアメリカ手話構文の統合的分析

松岡和美
慶應義塾大学

matsuoka@hc.cc.keio.ac.jp

1. はじめに

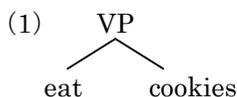
人間言語には、普遍性と多様性の二つの側面が同時に存在する。普遍性とは言語間に共通にみられる特性、多様性とは各言語で異なる特性のことである。近代言語学で提案された枠組みの中でも、特に生成文法は、人間言語の普遍性（共通に見られる特性）に注目する言語理論である。Chomsky（1965）は、人間言語に観察される性質は言語運用（performance）と言語能力（competence）に分けられると考えた。普段の生活で人々が話す文には、文法的な誤りや不完全な文が多くみられるが、それは言語運用レベルの現象であり、話者が頭の中に持っていると言われる母語の文法の知識（言語能力）とは別のものである。この言語能力の性質を詳しく調べることにより、人間言語の特徴を明らかにするというのが、生成文法の基本的な研究方針である。生成文法の枠組みでは、「人間言語」は一つであり、世界のすべての言語はその「方言」とされる。

60年代以降、ネイティブサイナーが用いる手話もまた、音声言語と同じ「自然（人間）言語の方言」ということを示す研究がアメリカ・ヨーロッパにおいて多くなされるようになった。「手話は自然言語である」という仮説からは、「音声言語の文法に見られる抽象的性質が、手話においても観察可能である」という予測が導かれる。その予測が支持されることを、動詞上昇という統語的現象の分析の紹介を通して示すことにより、日本の読者に海外での手話の理論言語学的研究の一例を示すことが総説である本稿の目的である。具体的には Matsuoka（1997）および Braze（2003）で主張された分析を、Chomsky（1995）の極小プログラムの枠組みを用いて再表示したうえで解説を加える。構成は以下の通りである。2節では、音声言語の統語分析にもとづいて提案された一般化を概観する。3節では、アメリカ手話における三種類の構文が、動詞上昇という統語操作により派生されるという Matsuoka（1997）の研究を紹介する。4節では、副詞が現れる位置を用いて Matsuoka（1997）の分析に修正を加えた Braze（2003）の研究結果を解説する。

2. 音声言語における動詞上昇

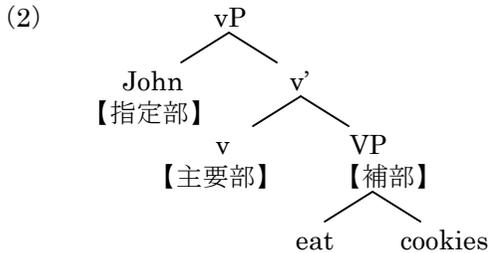
2.1. 文の派生：動詞上昇と屈折接辞

「文」は、語があるパターンにしたがって集まることにより構成される。このパターンを規定するのが「統語」の知識である。ここでは英語の文の派生を例にとる。他動詞を含む単文の典型的な派生においては、まず動詞と目的語の名詞が併合され、構成素 VP を形成する。



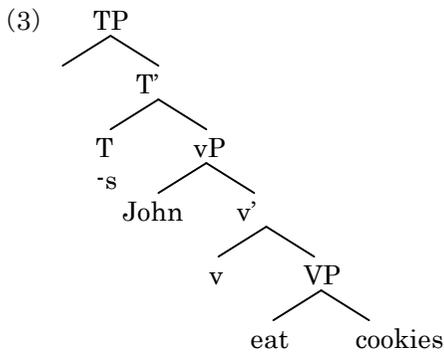
この VP は、動詞が意味的に要求する「動作主」や「経験者」を示す名詞句を含んで

いないので、完全な動詞句ではない。抽象的な使役の軽動詞 (v) が VP を補部にとり、動詞句 (vP) が完成する。主語は vP の指定部の位置に併合される。ある構成素の主要な部分を「主要部」と呼ぶ。図 (2) で示されているように、主要部はそれを補完する「補部」と併合され、さらにその上のレベルに「指定部」が併合されて句が完成する。

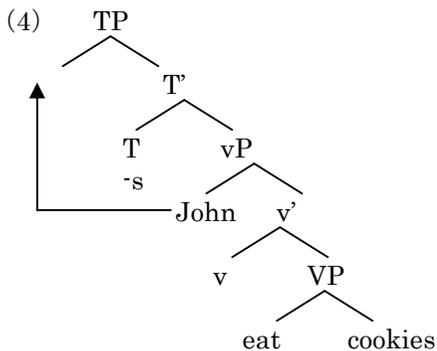


ここでは動作主 (John) と動作の対象 (cookies) という、他動詞が意味的に必要とする項はそろっているが、時制の情報は一切含まれていない。したがって (2) はあくまでも「動詞句」であり「文」ではない。

以下の図 (3) にあるように、vP は時制辞 (T) の補部として併合され、TP が構成される。主要部 T には人称と時制の情報が含まれるため、英語における三人称現在を示す接辞 (affix) である -s が含まれる。



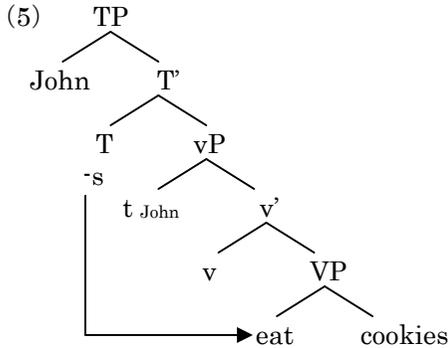
主語 (John) が TP の指定部に移動し、そこで T によって主格が認証される。



Lasnik (1995) にしたがって、接辞は単独では存在できず、音形のあるものと一体化 (併

動詞上昇を用いたアメリカ手話構文の統合的分析

合) する必要があると仮定する。英語の形態素 *-s* は **affix hopping** と呼ばれる移動により、動詞と併合する。以下の図 (5) の *t* は移動した句 (ここでは主語名詞句) が移動の前にあった位置を示す「痕跡」である。



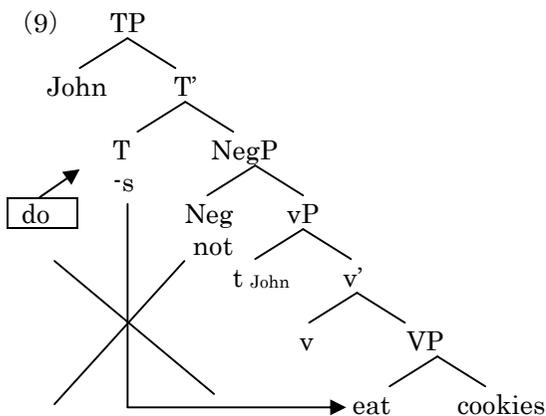
以上のプロセスの結果として、以下の文が派生される。

- (6) **John eats cookies.**
(ジョンがクッキーを食べる。)

この **affix hopping** は、接辞と動詞の間に否定辞がある場合は適用できない。 (* は非文法的な文を表す)。

- (7) ***John eats not cookies.**
(8) ***John -s not eat cookies.**

以下の派生のように接辞と動詞が隣接せず、**affix hopping** が適用できない場合は代わりに **do** 挿入が起こる。**do** は *-s* と併合し、**'does'** となる。**Neg** は否定の主要部を表す。



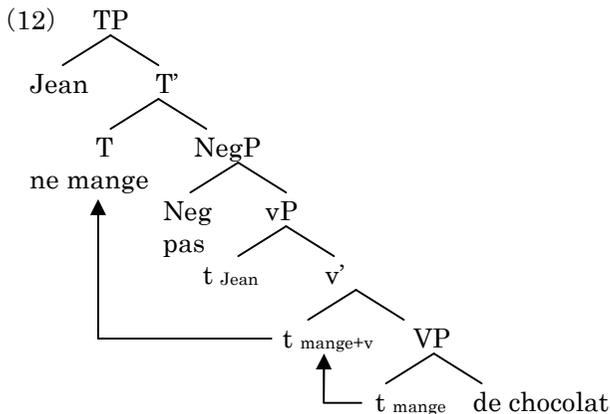
この結果、以下の否定文が派生される。

- (10) **John does not eat cookies.**
(ジョンがクッキーを食べない。)

下のフランス語の文 (11) は、(7) の文と統語的にはほぼ同一の構文であるが、文法的である。

- (7) * John eats not cookies.
 (11) Jean ne mange pas de chocolat¹.
 John eat not the chocolate.
 ‘John does not eat chocolate.’
 (ジャンがチョコレートを食べない。)

英語とフランス語の違いは、T (時制辞) の主要部が接辞の性質を持つか、素性の性質を持つかの違いに還元される (Lasnik 1995)。英語の T は接辞であり **affix hopping** を誘発するのに対して、フランス語では T は接辞ではなく、抽象的な統語素性を持つとされる。動詞は T の持つ素性に牽引 (attract) されて上方への移動 (動詞上昇・verb raising) を起こす。上の例 (11) でも、動詞 (mange) が否定辞の左側に現れることから、動詞が当初併合された vP 内の位置から、顕示的 (目に見える) レベルで T の位置に移動していることがわかる。(11) の文の派生プロセスは以下のように表すことができる。



動詞は主要部であるため、まず同じ主要部である軽動詞と一つになり、その後、動詞と v が一つになったものが、さらに上昇して T と一つになり、素性の照合を受ける。

動詞上昇の結果、動詞は動詞句の外部に移動するが、その動詞の移動と目的語の移動には密接な可能性があることが指摘されている。次節では、その議論の根拠となるアイスランド語のデータとその分析結果について解説する。

2.2. 動詞上昇と目的語転移との関係：ホームバーグの一般化

アイスランド語では「動詞が動詞句の外へ移動する」ことが「目的語が上方 (左方) へ移動できる」こととなる。この観察は「ホームバーグの一般化」と呼ばれている。以下の文 (13) のように、動詞が動詞句 ([] で示された範囲) の外に移動しているときには、目的語も動詞句の外へ移動することができる (以下の例の [] 内の v は動詞が移動の前にあった位置を表す)。この目的語の移動現象を「目的語転移 (object shift)」という。

動詞上昇を用いたアメリカ手話構文の統合的分析

- (13) Af hverju lásu nemendurnir **bækurnar**_i ekki [v t_i]?
for what read students-the books-the not
“Why didn’t the students read the books?” (Thráinsson 2001: 152)

次の例のように動詞が動詞句の外にないときには、目的語転移は適用できない。

- (14) *Af hverju hafa nemendurnir **bækurnar**_i ekki [lesið t_i]?
for what have students-the books-the not (ibid.)

アイスランド語のように「動詞上昇」と「目的語転移」の両方が観察できる言語の場合は、動詞上昇が起こって初めて目的語転移が可能になるというのが、ホームバーグの一般化の主旨である。この一般化が成り立つということは、動詞の移動と目的語の移動に密接な関係があることを強く示している。

動詞であれ名詞句であれ、移動が起こるときには元の位置に痕跡が残される。次節では、痕跡が存在することを示すデータと、痕跡の再分析について触れる。この新しい分析は、後のセクションで解説する手話の統語分析に大きい影響を及ぼすものである。

2.3. 移動のコピー理論：統語と音形の関係

生成統語論では、移動が起こると「元」の位置には「痕跡 (trace)」が残されると考えられてきた。その根拠の一つとしてあげられるのは *wanna* 縮約という構文である。

(15) にあるように、口語英語においては *want* と *to* は *wanna* という形に縮約される。

- (15) a. I want to see the movie.
b. I wanna see the movie.
(私はその映画を見たい。)

want と *to* が隣接していない場合には縮約は起こらない。

- (16) a. I want John to see the movie.
b. I wanna John see the movie.
c. *I John wanna see the movie.
(その映画をジョンに見てほしい。)

上の文の ‘John’ を ‘who’ に変えて、*wh* 疑問文を作った場合は、(17a) のように *want* と *to* が隣接しているように見える。もしこの2つが本当に隣接しているのであれば、*wanna* 縮約が可能になるはずであるが、現実には縮約は許されない。

- (17) a. Who do you want to see the movie?
b. *Who do you wanna see the movie?
(誰にその映画を見てほしいの?)

上記の観察は、(18) にあるように、*want* と *to* の間には目には見えない *who* の痕跡があることを示している。

- (18) who do you want t to see the movie

Chomsky (1993) は、痕跡は統語レベルにおいては、移動したもの（この場合は *who*）

のコピーであるという「移動のコピー理論」を提案した。

- (19) who do you want who see the movie

英語においては、2番目の who が音声のレベルで削除され、以下の文が派生される。

- (20) who do you want to see the movie

以下の (21-22) に見られるように、wh 疑問詞が複数の位置に現れる言語が存在するが、このことは、Chomsky の再分析を支持するデータと考えることができる。

- (21) Mit wem glaubst du mit wem Hans spricht? (ドイツ語の一方言)

'With whom do you think with whom Hans talks?'

(ハンスは誰と話すと思うの?)

- (22) Kas misline kas Demiri dikhla? (ロマニ語)

'Whom do you think whom Demiri saw?'

(デミリは誰に会うと思うの?)

(Thornton 1990: 227)

つまり、人間言語には、移動が起こるたびに統語レベルではコピーが残されるという普遍的な特徴がある。音声レベルでコピーを削除するかどうか、そして削除する場合はどのコピーを削除するかについて、言語間の差異 (多様性) があるということになる。

2.4. まとめ

この節では、音声言語の分析を通して得られた知見のうち、以下の三つの一般化について解説した。

- ・接辞は単独で語になることはできず、affix hoppingやdo挿入などの操作を経て、何らかの音形を持つものと一体化することが求められる (Lasnik 1995)。
- ・「動詞上昇」と「目的語転移」の両方が観察できる言語の場合は、動詞上昇が起こってはじめて目的語転移が可能になる (ホームバークの一般化)。
- ・移動が起こるたびに、元の位置には移動したもののコピーが残される (Chomsky 1995)。

次節では、アメリカ手話の研究で報告された統語現象が、上の一般化により統一的に分析可能であることを示す。

3. アメリカ手話における動詞上昇の分析

先行研究により、アメリカ手話の基本語順は SVO (主語—動詞—目的語) であるとされている (Fischer 1990, Liddell 1980)。典型的な単文は以下のようなものである²。

- (23) SALLY TYPE PAPER

'Sally types a paper.'

(サリーが論文をタイプする。)

しかし、アメリカ手話の統語研究においては、上の基本語順とは異なる語順を持つ構文が観察されている。Matsuoka (1997) は、その三つの構文はもとは基本語順にしたがって構成された構造を持っており、表層の語順は動詞上昇を伴うプロセスを経て派生されると主張した。本節では、Matsuoka (1997) で扱われている構文タイプと、その分析を

動詞上昇を用いたアメリカ手話構文の統合的分析

概観する。

3.1. 基本語順にしたがわない構文

3.1.1. 動詞後置文

Romano (1991) は、以下のような構文の存在を報告している。この構文の最大の特徴は、SOV (主語—目的語—動詞) 語順である^{3,4}。

- (24) S-H-E R-A-D-I-O LISTEN [asp:cont]
'She was continuously listening to the radio.'
(彼女はずっとラジオを聴いていた。)

この構文が許されるのは「～し続ける」「～しようとした」というアスペクト要素と動詞が共起している場合に限られる。(25) の例は、アスペクト要素を持たない動詞では、SOV の語順は文法的ではないことを示している。

- (25) *S-H-E R-A-D-I-O LISTEN
'She listens to the radio.'
(彼女はラジオを聴く。)

3.1.2. サンドイッチ構文 (Fischer and Janis 1992)

(26) に見られるように、サンドイッチ構文 (verb sandwich) は、SVOV (主語—動詞—目的語—動詞) という語順をとる。ただし、2つの動詞は同じ動詞の繰り返しである。

- (26) STUDENT NAME S-A-L-L-Y TYPE HER PAPER TYPE [asp:cont]
'A student whose name is Sally was typing and typing her term paper.'
(サリーという学生がレポートをタイプし続けていた。)
(Fischer and Janis 1992)

また、2つの動詞のうち、文末の動詞のみがアスペクト要素と共起できる。

- (27) *STUDENT NAME S-A-L-L-Y TYPE[asp:cont] HER PAPER TYPE [asp:cont]
(28) *STUDENT NAME S-A-L-L-Y TYPE[asp:cont] HER PAPER TYPE

先ほど見た動詞後置文と同様、この構文もアスペクト活用をしている動詞を含んでいるという点が重要である。

3.1.3. 目的語転移構文

アメリカ手話では、目的語が主語よりも左に現れる場合には、話題化の非手指動作が必要である。

- (29) a. *PURSE WOMAN LOSE 'The woman loses the purse.'
 t
 b. PURSE WOMAN LOSE 'The woman loses the purse.'
 (女性がハンドバッグをなくした。)

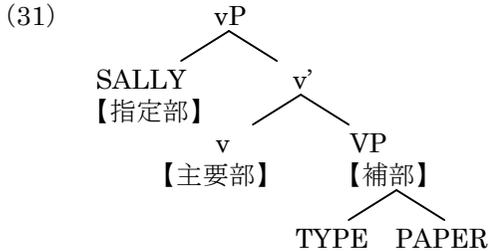
しかし、Liddell (1980) が指摘しているように、動詞がアスペクト要素をともなって文末に現れる場合には、非手指動作がなくても、目的語が文頭に現れる構文が可能となる⁵。

- (30) TOMATO GIRL EAT [I:durative aspect]
 'The girl eats tomatoes for a long time.'
 (少女は時間をかけてトマトを食べる)

ここであげた三つの構文に共通する特徴は、アスペクト要素をともなった動詞が文末に現れることである。アスペクトをもたない動詞が同じ構文に現れることはないため、動詞が「アスペクトの情報を持つこと」と「文末に現れ得ること」の間には密接な関連性があることがうかがえる。

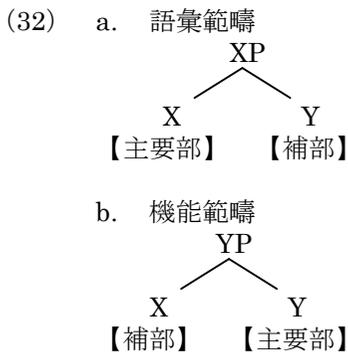
3.2. 動詞上昇を用いた統合的分析：Matsuoka (1997)

Matsuoka (1997) は、動詞が文末に現れるのは、右方向への動詞上昇の結果であると分析した。アメリカ手話が音声英語と同じ基本語順 (SVO) をとるということは、その動詞句の主要部 (つまり動詞) は、英語同様に句の左側にあることを強く示している。



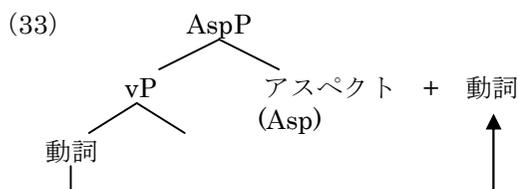
しかし、アメリカ手話では音声英語と対照的に、アスペクト要素を持つ動詞が句の右側に現れ得ることは、先にあげた三つの構文の存在から明らかである。

語は名詞・動詞・形容詞などの語彙情報を含む「語彙範疇」と、時制・一致・アスペクトなどの文法機能の情報を含む「機能範疇」の二種類に分類される。Romano (1991) は、アメリカ手話ではこの二つのタイプに属する主要部は、補部の位置が左右逆に生成されるという分析を提案している。



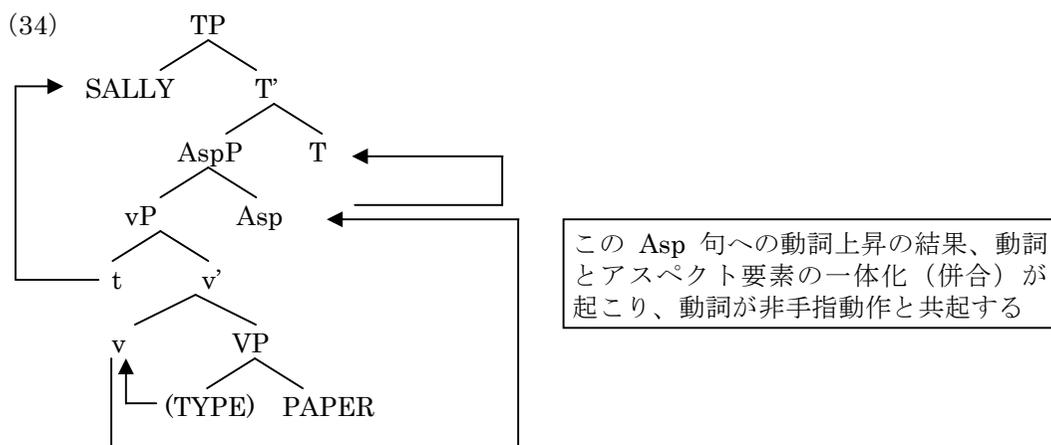
Romano は、動詞句と TP の間に、アスペクトを主要部とする句 (AspP) が存在し、それは右側に主要部をとると仮定した。機能範疇であるアスペクト句の主要部は、補部の右側に生成される。この構造を仮定すれば、アメリカ手話の動詞は、アスペクト句の主要部と一体になるとき、右側に動詞上昇を起こすという分析が可能になる。

動詞上昇を用いたアメリカ手話構文の統合的分析

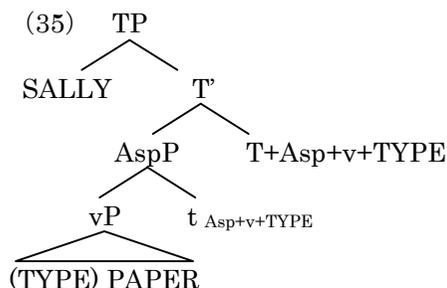


ここで、アスペクト要素は、2節で解説した接辞の一種であり、音形を持つ語と一体化する必要があると考える。その一体化は、目に見える（顕在的な）レベルで行う必要があるため、動詞上昇も（音声英語とは異なり）顕在的なレベルで行われ、その結果として、語順に影響をおよぼしている。

これまで述べてきた派生プロセスをまとめると、下図のようになる。



主語（SALLY）は、音声言語と同じように、主格の素性を得るために、T の指定部へ移動している。動詞（TYPE）は、主要部移動の特性として、最も近い主要部にしか移動できないため、 $v \rightarrow \text{Asp} \rightarrow \text{T}$ の順に上昇移動を行い、それぞれの主要部と一体化（併合）していく。移動がすべて終わった後の構造は以下の通りである（vP 内の構造は省略）。



動詞（TYPE）が元にあった位置には、2節で解説した「コピー」が残っている。このコピーは、アメリカ手話では必ずしも削除する必要はない（つまり、削除は随意的）と仮定する。元のコピーを削除すれば、先にあげた「動詞後置文」が派生されるし、元のコピーを削除しなければ、「サンドイッチ構文」が派生される。

- (36) 動詞後置文： SALLY PAPER TYPE [asp]
 (37) サンドイッチ構文： SALLY TYPE PAPER TYPE [asp]

2節で解説したアイスランド語の分析で観察されているように、動詞が動詞句の外へ移動することと、目的語転移との間には密接な関連性がみられる。同じパターンがアメリカ手話でも観察可能である。Liddell が報告している、非手指動作なしの目的語転移を考察してみよう。先にあげた例 (29) に示されているように、アメリカ手話の標準語順は SVO であり、通常の OSV 語順では目的語が非手指動作と共にあらわれる。

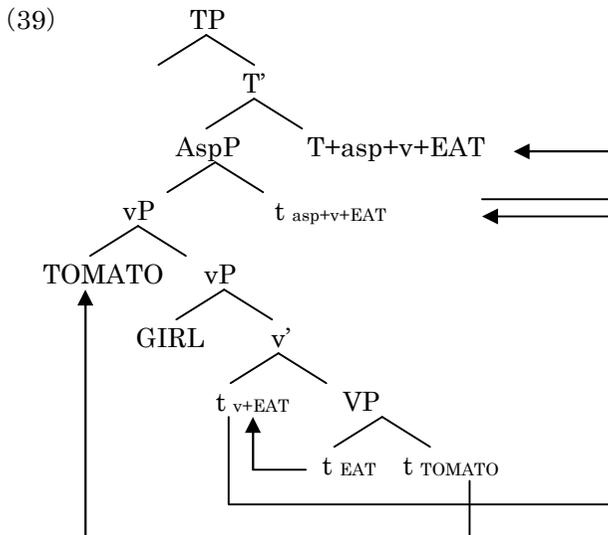
- (29) a. *PURSE WOMAN LOSE ‘The woman loses the purse.’
 t
 b. PURSE WOMAN LOSE ‘The woman loses the purse.’
 (女性がハンドバッグをなくした。)

しかし、動詞が以下の例のようなアスペクトを持つ場合には、非手指動作を伴わない OSV 語順が容認される。

- (38) a. TOMATO GIRL EAT [I:durative asepect]
 ‘The girl eats tomatoes for a long time.’
 (少女は時間をかけてトマトを食べる)
 b. *TOMATO GIRL EAT

(38a) では、動詞 (EAT) は、アスペクト主要部を経て、T 主要部へと右方向の上昇移動操作を受けている。この場合には非手指動作を伴わない目的語転移が起こり、OSV 語順が派生され得る。(38b) にあるように、目的語が話題化の非手指動作を伴わない場合、このような語順は許されない。この構文パターンは、アイスランド語で観察されている「ホームバーグの一般化」に従うものである。

下の派生図では、主語が元の位置の vP の指定部にとどまり、目的語が vP の指定部に転移し、OSV の語順が派生されるとしている (これらの名詞句の位置に関する議論については、次節で詳しく解説する。)



動詞上昇を用いたアメリカ手話構文の統合的分析

本節では、異なる先行研究で報告された三つのアメリカ手話の構文が、動詞上昇を伴う派生プロセスで統一的に説明可能であることをみてきた。また、動詞上昇と目的語転移の間に密接な関係があることが、アメリカ手話のデータから経験的に支持されることも明らかにした。次節では、動詞上昇と名詞句の移動の範囲について、Matsuoka (1997) の分析を修正することを目的とした Braze (2003) の研究を紹介する。

4. 副詞の位置と動詞上昇構文派生のプロセス : Braze (2003)

これまで見てきたように、Matsuoka (1997) の目的語転移の構文分析では、目的語が vP の指定部まで上昇するのに対して、主語は顕示的な (目に見える) レベルでは元の併合位置である、動詞句の指定部にとどまっている。この場合、主語の名詞句は目に見えない (解釈) レベルで TP の指定部に上昇して、主格の素性を認証されると仮定される。Braze (2003) は副詞の位置を調べることによって、主語が本当に動詞句の中にとどまっているのかどうかを検証した。

副詞には、文全体にかかるものと動詞句にかかるものの二種類がある。アメリカ手話では、文にかかる副詞は文頭・文末のどちらにでも現れることができる。

(40) YESTERDAY JOHN BUY BOOK

(41) JOHN BUY BOOK YESTERDAY

(昨日ジョンは本を買った。)

(Braze 2003: 36)

それに対して、動詞句にかかる副詞は、文頭に現れることができない。

(42) a. JOHN ALWAYS LOSE PAPER

b. JOHN LOSE PAPER ALWAYS

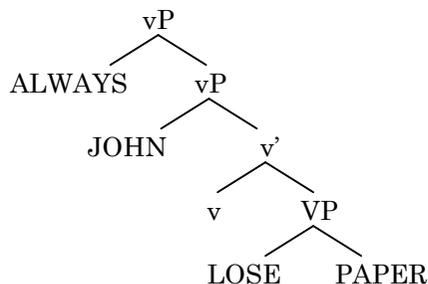
c. *ALWAYS JOHN LOSE PAPER

(ジョンはいつも論文をなくしている。)

(ibid., at 38)

副詞は、動詞がどうしても必要とする語ではないため、動詞句に付加される位置に現れる。それに対して、主語は動詞が含む意味役割の情報に担うために要求されている語であるため、動詞に併合されている。

(43)



したがって、もし Matsuoka (1997) の目的語転移構文の分析が正しいとすると、目的語転移構文においては、主語は動詞句につく副詞よりも下 (右) に現れることが予測される。しかし、この予測は経験的に支持されない。

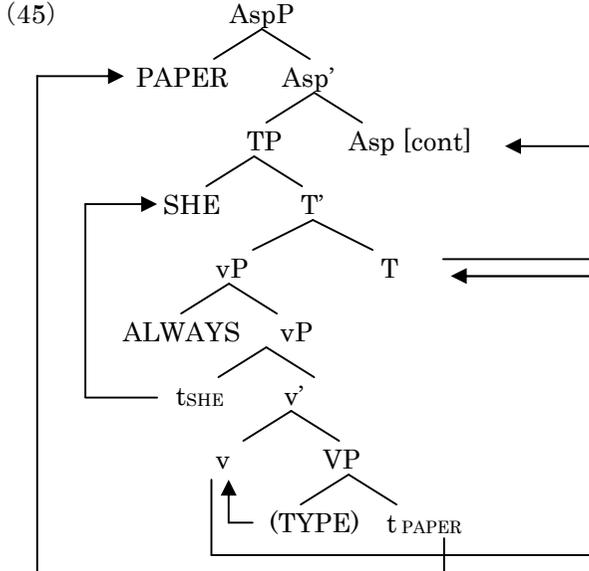
(44) a. *PAPER ALWAYS SHE TYPE[cont]

b. PAPER SHE ALWAYS TYPE[cont]

(彼女はいつも論文をタイプしてばかりいる)

(ibid., at 41)

このデータから、**Braze** は、目的語転移構文においても、主語は他の構文と同様に TP の指定部に移動しており、むしろ目的語の方が vP 指定部よりも上の位置に移動していると主張した。**Braze** の提案では、AspP は TP よりも上のレベルに併合される。目的語転移が起こるときには、目的語は AspP の指定部まで上方移動する。(以下の派生図の動詞句内の構造は極小プログラムの表示方式にしたがい、松岡によって修正されたものである。**Braze** の分析の重要な点は、動詞句よりも上方の派生に関するものであるため、この修正は彼の議論には影響しない。)



この分析をとれば、主語は常に TP 指定部の位置に移動するという分析が維持できるため、目的語転移が起こるときのみ、主語が動詞句内にとどまるという余分な規定を設ける必要がなくなる。また、**Braze** の分析には経験的な(データの裏付けによる)メリットがある。上記の派生を仮定すると、文にかかる副詞は TP に付加する結果、転移した目的語と主語の間に現れ、結果として **OadvSV** (目的語—副詞—主語—動詞) という語順が生じることが予測されるが、その予測は以下の例によって支持される。(以下の例の **baba** は、**MAYBE** と同時に現れる口の動きを表す。)

- (46) **baba**
TEST MAYBE JOHN PASS [cont]
 (ひょっとしたらジョンは試験に受かり続けるかもしれない。)
 (ibid., at 47)

以上みてきたように、**Braze** (2003) の分析は、**Matsuoka** (1997) で提案された、動詞上昇による分析を、より多様な構文に適用できるように改善する試みであると捉えることができる。

5. まとめ：音声言語と手話の統語分析

本稿では、生成文法が研究対象とする人間言語の普遍的性質が、音声言語の分析のみならず、アメリカ手話の統語現象においても観察できることを示した。アイスランド語とアメリカ手話の両方に、ホームバグの一般化のような、極めて抽象性の高い統語現象が観

動詞上昇を用いたアメリカ手話構文の統合的分析

察されることは、人間言語の普遍的性質を考えるにあたって大変興味深い。人間言語の統語的性質は、地域・歴史・モダリティと直接の関連性を持たないことが強く示唆されるからである。また、Matsuoka (1997) の分析がアメリカ手話で個々に報告されていた三つの構文に統一的な分析を与えたことは、アメリカ手話のネイティブサイナーが持つ統語知識の「根幹を成す」性質に迫るという視点からも重要である。Braze (2003) の修正案により、動詞上昇を用いた統語分析が与えられる文タイプの範囲が広がった。

アメリカ手話におけるアスペクト現象は動詞に追加される動きという形で現れるという点で、同時性の高い現象である (Sandler and Lillo-Martin 2006)。このように、ある言語の形態的特徴が統語現象である語順に大きい影響を与えるということは、言語知識の形態部門と統語部門の関連性を考察するにあたって、極めて重要な観察である。アスペクト現象は、手話の中でも言語間の差異が多く見受けられるため、日本手話などの、アメリカ手話とは異なる手話のデータを考察に含めることは、言語の普遍的特性の研究を進めるうえで欠かせないものである。

今回とりあげたアスペクト構文の他にも、アメリカ手話には特定の環境で同一の句が複数回繰り返される構文が多く存在する。これらの「繰り返し (doubling)」は、英語には存在しない構文をもたらすため、手話文法が同一コミュニティで使われている音声言語とは独立した文法特性を有すること (つまり、手話は文法的に音声言語に依存しないこと) を主張するにあたって有用な現象であると考えられる。ただ、この現象一般にあてはまる言語学的特性を探求するアプローチは現在の手話統語研究の中では活発ではない。たとえば動詞句が「道具」「場所」などの語彙情報を反映する形で活用するときにも、サンドイッチ構文と同じ SVOV 語順が観察される。Matsuoka (2000)・松岡 (2001) はこの「語彙サンドイッチ構文」をアスペクト型と統一的に扱う分析を提案しているが、Pichler (2001) は空間や道具を示す CL 表現をとまなう動詞 (spatial/handling verb) がもたらす OV 語順は、アスペクト型サンドイッチ構文とは別の統語プロセスの結果であると主張している。また、助動詞や wh 句の「繰り返し」現象についても、Petronio (1993) ではそれぞれに対して異なる分析を行っている。

少なくとも wh 句は主要部よりも大きな構成素を成すため、その繰り返し現象の分析には、主要部の場合とはまったく異なる派生を仮定する理論的必然性は高いと思われるが、その他の構文はすべて動詞または助動詞のような主要部要素が関わっていることから、繰り返し構文一般の派生に何らかの共通する統語操作が関与している可能性も考えられる。そのような統語特性の解明というプロジェクトにあたっては、該当する現象の多様性をもたらしていると考えられる認知的要素の理解も重要であろう。たとえば焦点 (focus) の統語および意味論的分析・手話の図像性・言語伝達における情報構造などが、繰り返し構文の派生に密接に関与していることは大いに考えられる。今回扱った構文を含む手話の統語現象は、人間の認知能力の解明についての新たな視点を提供する貴重なデータといえよう。

謝辞

この原稿の作成にあたっては、『手話学研究』の二人の査読者と星浩司氏に貴重なコメントをいただいた。英文校正には John Helwig 氏の協力を得た。表記や内容についてのすべての責任は著者にある。

注

- 1 フランス語では、否定辞は **ne** と **pas** の2つの部分からなるが、**ne** は省略可能であるため、**pas** が否定の主要部であることが広く仮定されている。
- 2 アメリカ手話の例文は通常、大文字で表記される。
- 3 ハイフンでつながれたアルファベットは、この手話単語が指文字で表されたことを意味する。

⁴ [asp:cont] は、動詞の動きの変化の形で現れる「～し続ける」という意味のAspect表現である。

⁵ Liddell が [I:durative aspect] と表現しているものは、注4にある [asp:cont] と同じ形態と機能を持つAspect要素である。

参考文献

- Braze, David (2003). Aspectual inflection, verb raising and object fronting in American Sign Language. *Lingua* 114: 29-58.
- Chomsky, Noam (1965). *Aspects of the theory of syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (1995). *The minimalist program*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Fischer, Susan (1990). The head parameter in ASL. In: Edmonton, W.H., and F. Karlsson (eds.), *SLR '87: Papers from the fourth international symposium on sign language research*, 75-85. Hamburg: Signum-Verlag.
- Fischer, Susan, and Wynne Janis (1992). *License to derive: Resolving conflicts between syntax and morphology in ASL*. Unpublished manuscript.
- Lasnik, Howard (1995). Verbal morphology: Syntactic structure meets the minimalist program. In: Campos, Héctor, and Paula Kempchinsky (eds.), *Evolution and revolution in linguistic theory*, 251-275. Washington, DC: Georgetown University Press.
- Liddell, Scott (1980). *American Sign Language syntax*. The Hague: Mouton.
- Matsuoka, Kazumi (1997). Verb raising in American Sign Language. *Lingua* 102: 127-149.
- Matsuoka, Kazumi (2000). The lexical verb sandwich in American Sign Language and the hybrid feature. In: Daly, Rebecca, and Anastasia Riehl (eds.), *The proceedings of eastern states conference on linguistics (ESCOL) 99*, 142-148. Ithaca, NY: Cornell University.
- 松岡和美 (2001). 「アメリカ手話の『サンドイッチ構文』の分析：二つのタイプの動詞上昇」. 日本手話学会第27回大会（金沢大学）.
- Petronio, Karen (1993). *Clause structure in American Sign Language*. Unpublished doctoral dissertation, University of Washington.
- Pichler, Deborah Chen (2001). *Word order variation and acquisition in American Sign Language*. Unpublished doctoral dissertation, University of Connecticut, Storrs.
- Romano, Christine (1991). Mixed headedness in American Sign Language: Evidence from functional categories. *MIT working papers in linguistics* 14: 241-254.
- Sandler, Wendy, and Diane Lillo-Martin (2006). *Sign language and linguistic universals*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Thráinsson, Hoskuldur (2001). Object shift and scrambling. In: Baltin, Mark, and Chris Collins (eds.), *The handbook of contemporary syntactic theory*, 148-202. Oxford: Blackwell.

——2008年7月10日受稿、2008年8月7日受理——

A Unified Approach to Syntactic Patterns of American Sign Language with the Verb Raising Analysis

Kazumi Matsuoka
Keio University
matsuoka@hc.cc.keio.ac.jp

ABSTRACT

This paper presents an analysis in Matsuoka (1997) of three seemingly unrelated constructions in American Sign Language (ASL): verb final, verb sandwich, and object shift. It is argued here that the three constructions are all derived via verb raising targeting the Asp head, which is assumed to be head-final in ASL. It is also shown that the Copy Theory of Movement (Chomsky 1995) relates the verb final and the verb sandwich constructions. The syntactic analyses in the previous work are presented in a recent framework in the Minimalist Program (Chomsky 1995). Written for the audience who might not be familiar with Minimalist Syntax, the paper includes an introduction of the derivation of sentences in spoken English and French. Braze's (2003) amendment of Matsuoka's model is also presented. In the discussion of the object shift construction, the paper shows that spoken and sign languages both exhibit the abstract syntactic property regarding the availability of verb raising and object shift. Particularly, it is noteworthy that Holmberg's Generalization can be observed in the object shift construction in both spoken Icelandic and ASL. The analysis presented in this paper strongly indicates the possibility that verb raising and its relationship to the availability of object shift are a part of the universal aspects of Human Language.